

聖書は意外と科学的

岩本友則

宗教なんて非科学的、当然聖書も非科学的と多くの方が思っていると思います。私が、聖書について非科学的と感じた点が2つあり、多分、多くの方と共通していると思うのです。

第1が、神が天地万物を想像したと言う創造論です。これに対し科学的観点から主張される方は、日本の義務教育において進化論の教育を受け、単細胞生物から人間にまで進化してきたと言うものです。

しかし、進化論は、一つの学説であり、証明されていません。それどころか、科学的観点からは、矛盾に満ちているのです。例えば、物理学の熱力学第二法則「エントロピー変化」は、増大する方向であり、これは退化する方向であり、進化する方向ではありません。また、生物学における染色体は、生物によって、その数が異なります。例えば、人は46、猿は48、馬は64、鳩は16、金魚は104です。人と猿の差は、たったの2個ですが、この差は、進化論の証明になるどころか、否定されてしまいます。

第2が、16世紀の天文学者ガリレオ・ガリレイの地動説に対する当時のローマ法王庁による宗教裁判と迫害です。その宗教裁判におけるガリレオ・ガリレイの発言「それでも地球は動いている」と言ったことは、とても有名です。

聖書には非科学的な面が、たくさんあることも事実です。例えば、死者の蘇り、水の上を歩くキリストなどがあげられます。これは、別の言葉で奇跡と言われます。奇跡では、言い表せないのが、処女降誕（キリストの降誕）でしょう。これは、非科学的であり、一方では、実に宗教的であります。それは、私達人類に対する神の深い摂理と愛を示すものと考えられます。

前書きが長くなりましたが、本題に入っていきたいと思います。聖書が、非科学的とされる第2の点について考えてみましょう。聖書に、16世紀のローマ法王庁がガリレオを、迫害した地動説を否定する根拠があるのでしょうか？

ガリレオは、28才から46才までの18年間、イタリアのパドヴァ大学の教授となり数学を教え、その傍ら、自ら制作した望遠鏡を用いて天体を観測し、「木星の4つの衛星」「金星の公転と満ち欠け」「太陽の黒点」などを発見し、コペルニクスの地動説を証明しました。このためローマの異端審問所に召喚され宗教裁判にかけられ、地動説に関する一切の著述・講義を禁止されてしまいました。それでも所信を曲げずに書き上げた「天文対話」は出版禁止となり、再び宗教裁判にかけられ投獄されてしまうのです。彼は、1642年77才でその生涯を閉じますが、亡くなった時、彼の亡骸は家族の墓地に葬ることも、弔辞を読むことも、碑を建てることも禁止されたのです。現在その墓は、フィレンツェのサンタ・クローチェ教会に多

くの偉人達と並んで置かれています。

ローマ法王ヨハネス＝パウロス2世によりガリレオの宗教裁判が見直され、ローマ法王庁はこの裁判の誤りを認めたのは、なんと、彼の死から350年もたった1992年のことでした。

旧約聖書の中程に「ヨブ記」があります。このヨブ記の記述から考えてみましょう。創世記から始まる旧約聖書の並びから見て、創世記に始まり書かれた古い順に並べられていると、多くの方が思われるのですが、実は違うのです。ヨブ記の記述は、非常に古い時代背景であり、アブラハムの時代ではないかという説もあります。また、ヨブ42章11節で記されている貨幣単位は、創世記33章19節と、ヨシヤ記24章32節にだけ用いられている古い貨幣単位であります。

ヨブ記のテーマは、何故、正しい人（義人）が、困難（苦しみに）に遭うのか！です。困難や苦しみに遭っている方、是非ヨブ記を読んでみて下さい。

ヨブ記の本来のテーマから外れて、違った側面からヨブ記を見て見たいと思うのです。ヨブ記の26章7節、8節に「神は北を虚空に張り、地を何もない上に掛けられる。」「神は水を濃い雲の中に包まれるが、その下の雲は裂けない。」と記されています。

大昔のこの時代、なんと的確に、地球が浮いていること、雲に関する記述を、知っている事でしょう。

ヨブ記の38章13節、14節には、「これに地の果て果てをつかまえさせ、悪者をそこから振り落とさせたことがあるか。」「地は刻印を押された粘土のように変わり、衣服のように色づけられる。」と記されています。

14節の刻印に注目して頂きたいのです。今日の刻印は、堅い金属で出来ていて、文字を刻み、それを、ハンマーで、金属に打ちつけ文字を付けます、これに対し、この当時カルデア人が使っていた刻印は、ローラーのようであったと言われています。私は、見たことがありませんが、想像するに写真の様であったのではないのでしょうか？



13節に「これに地の果て果てをつかまえさせ、悪者をそこから振り落とさせたことがあるか。」とあり、振り



落とすためには、回ることが必要でしょう・・・とすれば、地球は、何もないところに浮かんでいて、回っている。即ち、自転（天動説ではなく地動説）していることを、前提とした記述ではないかと思いませんか？

更に、写真のローラーの向きを90°変えてみて下さい。そして、地球儀の写真と見比べて下さい。

地球儀を見ると 14 節の「地は刻印を押された粘土のように変わり、衣服のように色づけられる。」の記述、地球が、衣服のように色づけられた様を感じませんか？ そのように感じるのは、私だけではないと思います。

今日の科学において、聖書の記述を、完璧に否定出来る所がどれだけあるかと考えた時、聖書は、意外と科学的だと思うのは私だけでしょうか？

